

明治四十三年 起元二千五百七十年  
 本紙 一收金一圓 二收金一圓  
 定價 金一圓 三收金一圓 四收金一圓  
 月曜日 五收金一圓 六收金一圓 七收金一圓  
 廣告 金一圓 八收金一圓 九收金一圓  
 料金 五十七字 十收金一圓 十一收金一圓  
 發行所 京師西門小門外 電話六六三  
 印刷 松久 高木 久馬 太

[illegible]

し湖南鐵道敷設の晩に到らば同方面に於ける人口の増加は蓋し著しきものとあらん

湖南鐵道敷設の晩に到らば同方面に於ける人口の増加は甚しきものあらん

奴は威強つてゐる、斯ういふときに席順  
す、食ふや食はずの百姓でも古く居る  
何でも村に古く居る者が上座に坐りま  
ズ、食ふや食はずの百姓でも古く居る  
遠へ居列んで居た連中が名主を見る  
一同「イヤれ名主様入来つしやいまい

第四十四回 九堂百戰  
中村屋與兵衛翌日は駕籠で妊のれせん  
を連れまして甚右衛門の方にやつて來

七十五噸)を除きては何れも頗ぶる  
若い者が十四五名も揃つて、傳吉か  
金を預りまして寶田町に魚を買出し

見ること殆んどなく哈爾濱に在りて  
 東清鐵道各驛附屬驛に在りて米人  
 群山理事廳管内に於ける本邦人の數は  
 戸數二千七百十四戸人口八千九百八  
 人又ヨシ、グヅ、蓋出した  
 んだ  
 又ヨシ、グヅ、蓋出した  
 んだ  
 又ヨシ、グヅ、蓋出した  
 んだ

甲「コレね前方何うしたヤ  
たか」  
ズツと正廳へ居てビツリと座す

露國墓地の回收

野金局が附帯事業として口邊外  
の事は歐洲先遣團にも其の如  
く發せられたる故に村氏が  
於て我遺信者に於ても故郷村氏が  
南滿洲に散在する戦死露兵の墓地は從  
小都會となり昔日の池澤沼澤は變じて  
といたわい

がねへ、  
又「底へ入  
早「それは出資だ  
又「

あるは「思鹿吐けこの野郎、乃公かど  
 こには太閤様が矢矧の櫓で乞食して御  
 膳ふて入來つた、斯ういふ芽出てへ  
 んだから、僕は首即馳走になるが宜  
 しくお願ひする」

「要請し且つ是迄我國にて同意地の本邦人居住し其他管内到處殆ど本邦人を食ふのだ、知らねぬか、ア  
 収を要請し且つ是迄我國にて同意地の本邦人居住し其他管内到處殆ど本邦人を食ふのだ、知らねぬか、ア  
 費用の全部を弁償せ 邦人の居住せざるなり状態なり今は是等食物拵へを知らない連中がするんで

があるだ」下らねへ事をいひ出して來る、そんなことをいつて席願を爭ふも、飲のう打たうと云つても、なか／＼つて呉れねへが、無錢で酒を飲んだら食つたりすることさう奇つし。

に於ては其の安全を確保するに當り、  
 行方此事は農商務省に於ても  
 意見あり、例の労働保険の如きは  
 同委員会よりドブソントオフ少尉と  
 我政府の好意と政治的實地調査の爲  
 なり而して其最も膨張の事にあらず  
 明治三十九年税關所設置以後にして日  
 神土さん、百代五人組、イ

名譽金銀牌受領



販賣員を募集す  
米國シンガー裁縫機械會社  
京 城 支 店  
西小門通り(電話一五七五)  
一鴨綠江松材現木  
長三八尺五寸以上二間半

京宛旭町三丁目(電話五六八番)  
 上候  
 に賢知仕候御望の方は御來候被下度  
 建築業柴田芝六  
 表具部開業  
 魂額屏風天井壁張及表装一切  
 並書畫の需用に應ず  
 旭町三丁目三日月湯隣  
 柴田表具部  
 網光島久太郎  
 眞光島久太郎  
 電話五六八

京城曙町電話二八七番  
錦監府所用  
宮内府御用  
軸心木炭  
金形麻風  
顔面襪子  
座張天井

印章彫刻  
エム印彫刻  
京城市町四丁目  
赤帽子號印鋪  
電話九三番  
諸官衙御用達  
奥野岩太郎  
南大門通三丁目光宣門側  
御待合  
紅葉  
電話一三八二番

**「大營養新藥」**

人體の肥料  
牛乳の數倍

次亞小飲罐  
イモノナチ

+ =

時々のイロ物で保つてはハズレ、濃度の低くみかたに於ける人物と云ふ事、其の多量を以て得る。

はば 薬

◎賣捌は全國各藥店にあり

本廠大阪東區南船場西久太衛門

家料理  
 香港九龍下  
 公國下  
 松香庵  
 白永  
 吉福  
 一三九二款



●中島博士の出發  
中島農學博士九  
日午後十時四十分南大門發釜山に向ふ

●佐竹書記官東上。土地調査局書記  
官佐竹義平男は九日夜出發東上せり  
●秋本理事官入京。鎮南浦理事官秋  
本豊之進氏九日入京山本旅館に投宿

●森松延吉氏出發 醫學士森松延吉氏は去る九日當地出發平壤に向へり

▲京城手形交換高▼

八月 金 高 枚 數

十日 九〇、八二、七五 三四七

▲治外法權▼ 内地ちゆうどの新聞曰く  
京城きやうじやうの新聞を見ても時局じきよくの事は一切判  
らなくなつたと、時局じきよくの事が京城きやうじやうの新

閱でソレホド知りたいなら三年許り訪  
の本紙を見たら良かるう▲世には堂義  
なしに單に讀者の好奇心を満足させる  
爲に目新しい記事を掲げんとする新聞

へ時局問題は大切な政治關係の事であ  
る。伊に良く考へて見玉  
う。首無し女の事件と同視すべきもので  
はない。ト云ふと傍から誰かが口を出  
して西洋に於ける言論自由の例を説く

でゐるうが、西洋の事なら乍倅ゴッ  
ナが入手の物だ▲ツイ数日前自稱本邦  
駐在埃太利大使夫人が東海道の流車中  
で鐵道規則違反の所爲をやつた、乗客

に與する一顧同仁の車掌は、女に注意を與へた。▲車掌の注意に反省すると思ふの外、彼の女は大使夫人たるを笠に着て無法にも車掌に暴行を加へた、イブレ此問題は何とか極まるであらうが上流

外人中にもコンナ非文明な者があるのは困まつたものだ▲華は少し古いが寺内統盛が南大門みなみだいもんへ着された當日記者は下の如き出来事を同驛内で見受けた

一外國人年齒は四十位、身體は才知で、  
頭にはヘルメツト帽を被つて居た、此  
男ドウ云ふ譯か改札口から出でんとし  
た、驛夫は丁寧に止めた、彼れは日本  
語を以て己れは領事だぞと高聲に云つ

し驛夫を突飛ばして改札口から出せたり  
▲イクラ傾事だからとて故意に鐵道規則を犯すとは不埒の事だ、況んや驛夫と突飛ばすなどの非紳士的動作を演ず

るとは例の事だ、横太科大徳夫人と云ひ亦自ら領事と名乗る此男と云ひ各自本國の体面を傷けるものだ▲助役問題に關し民議員中に京城派と龍山派とがわつて争つて居るツウだが困まつた

ものだ、盃が濟んだ許りでコウ喧嘩するヨ―では前途が思やられる▲此頃の京城日報は本紙一昨年頃の社説を模倣内容共に其儘連載して居る、本紙にと

つては光榮の譯だが、日報子にとつてはドウか敢て抗議をする譯ではないが一應れことばりして置く▲昨本欄内に在つた新波神社局長は水野の誤りだ、を訂正する。

△真寶四一八聖△奉化六、〇〇〇里  
△長善八七〇里△計七、七〇〇里  
●兩都畿未入京 執事平旗校店員  
の國氏は九日入京不知火旗館に投宿

同氏は九日、東京天皇様を授けられた。



らふかと云ふに決して左様でな  
本催眠學會長小野福平先生の談

七、七〇〇里  
鐵嶺平康支店員  
火旅館に投宿  
明治生命社員の  
に投宿したる

大日だいにち依よる  
し鄭ていも同時どうじに左膝關節下部と

七、七〇〇里  
鐵嶺平康支店員  
火旅館に投宿  
明治生命社員の  
に投宿したる

て即死  
手の上  
注意厳しき爲め意の如く自  
ず銀鳥も東が放免になるや

七、七〇〇里  
鐵嶺平康支店員  
火旅館に投宿  
明治生命社員の  
に投宿したる

事も出来は、大に憤慨してつや子を  
 にと毎朝の目前にて如斯事全然

七、七〇〇里  
鐵嶺平康支店員  
火旅館に投宿  
明治生命社員の  
に投宿したる

に呼よび主人しゅじんいと云いひし  
隊たい合がっ同どうにて益えきを開ひらける  
限かぎり特とく別べつの大だい魅めい強きやうにて

七、七〇〇里  
鐵嶺平康支店員  
火旅館に投宿  
明治生命社員の  
旅に投宿したる

座は當興行に  
御座いません少々都  
戸料なし平場  
して居る次第です（サ

七、七〇〇里  
鐵嶺平康支店員  
火旅館に投宿  
明治生命社員の  
旅に投宿したる

（保）があるから休載

七、七〇〇里  
鐵嶺平康支店員  
火旅都に投宿  
明治生命社員の  
に投宿したる

電話一一二九番

七、七〇〇里  
鐵嶺平康支店員  
火旅都に投宿  
明治生命社員の  
に投宿したる

特別五圓年齡寫真要

七、七〇〇里  
鐵嶺平康支店員  
火旅館に投宿  
明治生命社員の  
に投宿したる

[illegible]

貨物運送取扱  
關稅貨物取扱

國內通運株式會社

京城南大門驛前  
京城支店

電話七〇九番  
電話一七九番

仁川驛前  
仁川出張所

電話五一一番  
電話五一一番

梁山驛前  
梁山出張所

電話五三六番  
電話五三七番